

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02239

研究課題名(和文)反抑圧的で対等な場づくり・地域づくりに向けた支援者変容の可能性

研究課題名(英文)The possibility of social worker's transformation toward the anti-oppressive practice

研究代表者

竹端 寛 (Takebata, Hiroshi)

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

研究者番号：90410381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、反抑圧的で対等な場づくり・地域づくりとは一体どのようなものであり、そうした場づくり・地域づくりに向けて、支援者はどのように変容する必要があるのか、を検討した。研究成果としては、スローシティー運動における反抑圧的実践のネットワーク化の分析や、人の臨終のプロセス、あるいは子育てにおける相互変容プロセスにおいて反抑圧的で対等な場や関係性がどのように生じていくのか、を分析することも出来た。また研究班三人が「教育/研究/社会」を切り分けず、どのような反抑圧的実践を目指してきたのか、をオートエスノグラフィックに書き上げることもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、研究者が自らの教育・研究・社会活動をオートエスノグラフィックに描くことにより、三つの領域を切り分けることなく一元的に捉える視点を提供することが出来た事が挙げられる。また、社会的意義としては、フィールドワーク実践が研究者や対象者の実存と深く相互作用している実態を明らかに出来たことであろう。これらを通じて、反抑圧的で対等な実践において、研究者も客観的傍観者ではなく、一人のアクターとして関与し・変容してきた実態も明確にすることが出来た。

研究成果の概要(英文)：This study examined the realities and challenges of anti-oppressive and equal placemaking and community building. We also examined how supporters need to be transformed in order to achieve such placemaking and community building. The research findings can be summarized in the following three points.

(1) Analysis of the networking of anti-oppressive practices in the Slow City movement; (2) Analysis of how anti-oppressive and equal relationships emerge in the process of human dying or in the process of mutual transformation in parenting; (3) An auto-ethnography-based analysis of what kind of anti-oppressive practices the research team members have been aiming for in relation to education, research, and society.

研究分野：福祉社会学、社会福祉学

キーワード：反抑圧的実践 アクターネットワーク理論 エンパワメント 支援者支援 フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2014年度からの基盤研究Cにおいて、コミュニティソーシャルワーカー(CSW)が権利擁護を基盤とした実践を行う際に、どのような社会起業家精神が求められるのか、というCSWの変容課題を整理してきた(竹端他2015)。2017年度からの基盤研究Cでは、支援者が社会起業家精神を持って新たな何かを創出するには、安心安全な場における自己開示や小さな試行錯誤が必要不可欠であることを明示した(竹端他2017)。また抑圧的な現実に対して「自由こそ治療だ」「入所施設はアブノーマルだ」と異議を唱え、別のやり方を模索する生成的対話の中から、実際に精神病院を解体したフランコ・バザリアや入所施設の論理を破壊したベンクト・ニリエのコミュニティエンパワメントに繋がるプロセスも整理した(竹端2018)。さらに反抑圧的ソーシャルワーク(Anti-Oppressive: AOP)の実態をカナダで調査し、対象者・地域の置かれた抑圧的な構造を批判的に意識化し、個別支援のみならず社会変革を志向した基盤教育・現場実践がなされていることを掴んだ。ソーシャルワークのグローバル定義を今後日本で実現するために、AOPの視点が必要不可欠であることも整理できた。

これらの研究の中で、対象者の内在的論理に寄り添い、対象者・地域のエンパワメントにつなげる支援を行う上では、対象の置かれた抑圧的状況・構造を理解した上で、それを乗り越えるための、対等で開かれた生成的対話の場づくりが必要であること、それを実践するためには、支援者自身がアクターとして場づくりに主体的にコミットする必要があること、などを整理することが出来た。その上で、以下の「問い」が生まれてきた。

< 研究課題の核心をなす学術的「問い」 >

反抑圧的で対等な場づくり・地域づくりとは何か

この種の場づくり・地域づくりを展開する上で支援者がどのように関与すると良いのか

上記二つを実現するための支援者変容の課題とは何か

2. 研究の目的

本研究では、上記の研究結果を踏まえ、反抑圧的で対等な場づくり・地域づくりとは一体どのようなものであり、そういった場づくり・地域づくりに向けて、支援者はどのように変容する必要があるのか、を、アクターたちのネットワークを辿る事で実証的に示すとともに、このようなネットワーキングを今後の支援者が実践するために必要な課題とは何か を整理することを、研究目的とする。

上記の研究目的を果たすために、以下の三つをサブカテゴリーとして掲げた。

< 学術的「問い」を具体化したサブカテゴリー >

反抑圧的で対等な場・地域づくりに関する先進地視察と理論研究の融合

上記の場・地域づくりが可能となった現場における様々なアクターのネットワーキングに関する実証研究

中間項的支援者(研究者、教育者)が媒介子に変容するために求められるエンパワメント支援に関する理論的考察

3. 研究の方法

2019年の申請書執筆時点では、国内外への現地調査を予定していたが、その後未曾有のCOVID-19が猛威を振る事態に直面し、国内外の出張が全く出来ない、という事態に直面した。だが、それは私たちの研究班にとって、予想外の事態をどのように受け止め、移動制約性という全世界の事実を、本研究班の研究内容にどのように活かすか、を必死に模索する機会ともなった。

結果的には、毎月一度のZoom研究会を行い、移動制約性において生み出された時間を有意義に活用し、理論研究を大きく前進することが可能になった。そして、インテンシブな研究会での議論を通じて、3つの研究目的をアウトプットするための研究枠組みを整理することが可能になった。また、ゲストも迎えての議論の機会なども増やし、研究計画に記載した内容を、方法論を変えても、実質的に達成できるように、動きを変えていくことにした。

4. 研究成果

研究目的の三つのサブカテゴリーごとに研究成果の概略を報告した後、2024年当初を目処に刊行予定の、研究班三人による共著本の概要を示す。

(1) 反抑圧的で対等な場・地域づくりに関する先進地視察と理論研究の融合

竹端は共著『脱「いい子」のソーシャルワーク 反抑圧的な実践と理論』を刊行した。同書

籍の中で、反抑圧的な実践を行うための、支援者の変容課題を検討し、言語化することが可能になった。また竹端は学会口頭発表「医療保護入院を巡る「中空構造」：「家族化」「商品化」された「残余」モデルを越えるために」においては、日本の精神医療で続く抑圧的な権力関係がなぜ維持されるのか、「ケアする・されるの『強制』がなぜ生じるのか」を歴史的に振りかえりながら検討した。

(2) 上記の場・地域づくりが可能となった現場における様々なアクターのネットワーキングに関する実証研究

鈴木は研究論文「小さな都市で「よく生きる」の挑戦 イタリア型スローシティ「チッタスロー」運動の理念と展開」の中で、チッタスロー運動が目指した「よく生きる」実践を通じて、反抑圧的な地域づくりとはなにか、実践地のアクターのネットワーキングの実際について、考察した。また鈴木は研究論文「“うごき”を捉えるフィールドワーク マリノフスキの「不可量部分」とラトゥールの「連関の社会学」を手がかりに」の中で、アクターネットワーキングセオリーとフィールドワークの接点を理論的に整理することができた。

(3) 中間項的支援者(研究者、教育者)が媒介子に変容するために求められるエンパワメント支援に関する理論的考察

竹端は研究論文「死にゆく者が生者を束ねゆく：アクターネットワークセオリーで迎える義父の死」を刊行する。この中で、中間項的な存在が媒介子に変容するとはいかなることか、を「死にゆく者」を題材にオートエスノグラフィー的に迎えることができた。また竹端は単著『家族は他人、じゃあどうする？ 子育ては親の育ち直し』のなかで、ケアにデタッチメント(中間項的存在)であった筆者が、子どもという存在に揺り動かされ、どのように媒介子的な存在に変容していったのか。その際、子どもや妻、こども園やママ友などにいかにエンパワメントされていたか、を考察した。このオートエスノグラフィーによって、中間項的存在が媒介子に変容するための変容課題を掴むことが出来た。

(4) 『あなたと私のフィールドワーク：関係性の変容から始まる旅(仮題)』書籍化に向けて

国内外への現地調査が出来ない中で、毎月 Zoom でのインテンシブな研究会を続けるうちに、研究班三人が勤務する大学も一つのフィールドだと捉え直してみると、その現場で、「教える/教えられる」の関係性を越えて、ともに試行錯誤をし、モヤモヤし、時にはぶつかり合いながら、学び合い、相互変容してきた実態が明らかになってきた。「教育/研究/社会」を切り分けず、どの場でも相互変容に基づく学び合いの関係性を生み出してきた事が明確になった。つまり、教育現場における反抑圧的な場づくり、地域づくりとは何か、そこに筆者三人はどのようにアクターとしてコミット出来ているのか、学生や地域の人びとといかなる相互作用の中で相互変容していったのか、を記述することが、本研究班の成果報告になることが見えてきた。

そこで、この議論内容を踏まえた研究班三人による書籍化の検討が2021年から始まり、現代書館が出版企画を受け入れてくださったので、研究成果のアウトプットとして共著を執筆することになった。2021年秋以後、毎月一回、研究班三人に現代書館の編集者を加えたオンライン執筆会議を定期的に行い続け、本研究の成果をどのように社会に還元することが可能か、そのために、各人がどのような原稿を生み出すべきか、を各人の原稿を読み合わせの中で検討し、何度もなんども書き直すプロセスを続けてきた。この報告書を執筆している2023年5月の段階で、8割の原稿作成が終わり、2023年9月に脱稿、2024年1月刊行を目指して動き続けている。

現時点での目次概要を示しておく。

1部 あなたと私の相互変容(教育)

「教える 教えられる、をほぐす」(竹端)

「言葉にならない体験を共有して～ある夜の『語り合い』から～」(高橋)

「『本物を見た!』 海外フィールド研修における学生と教員の相互変容」(鈴木)

2部 実存のフィールドワーク(研究)

「引き出しのなかの記憶」(鈴木)

「フィールドを駆け抜けて」(竹端)

「行った先で習いなさい」(高橋)

3部 他者と出会い、共に変わる(社会)

「自分が変わり、社会も変わる」(高橋)

「対話的な地域コミュニティにむけた「学びほぐし」」(鈴木)

「対話と相互変容」(竹端)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 竹端寛	4. 巻 24
2. 論文標題 死にゆく者が生者を束ねゆく：アクターネットワークセオリーで辿る義父の死	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木鉄忠	4. 巻 21
2. 論文標題 小さな都市で「よく生きる」の挑戦 イタリア型スローシティ「チッタスロー」運動の理念と展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共愛学園前橋国際大学論集	6. 最初と最後の頁 69 90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木鉄忠	4. 巻 25
2. 論文標題 20世紀からの答えなき問いかけ：「例外状態」のフィールドワークにむけて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学社会科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 79 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋 真央	4. 巻 58
2. 論文標題 女子大学における女性教員の職位別割合の現状について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 甲南女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 竹端寛	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 ソーシャルサポートとレジリエンス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 227-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹端寛	4. 巻 4
2. 論文標題 支援者の脱施設化の思想：トラウマ化された病院を越えて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神医療. 第5次	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木鉄忠	4. 巻 24
2. 論文標題 “うごき”を捉えるフィールドワーク マリノフスキの「不可量部分」とラトゥールの「連関の社会学」 を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央大学社会科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 159-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹端寛
2. 発表標題 医療保護入院を巡る「中空構造」：「家族化」「商品化」された「残余」モデルを 越えるために
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹端寛
2. 発表標題 開かれた対話性 私たちがほんまもんの仕事をするために
3. 学会等名 日本産業精神保健学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木鉄忠
2. 発表標題 惑星社会のシステム混乱と人間の線引き イタリアからのメッセージ
3. 学会等名 「人の資本主義」研究プロジェクト第11回カンファレンス「資本主義と疫病と生命」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋真央
2. 発表標題 私にとって”国際ボランティア”と
3. 学会等名 第22回国際ボランティア学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋真央
2. 発表標題 女子大学における女性上位職・女性管理職の現状
3. 学会等名 女子大学連携ネットワーク 国際女性デーシンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木鉄忠
2. 発表標題 更新情報なきフィールド調査のリフレクション
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroshi Takebata
2. 発表標題 Why do mental hospitals remain in Japan?: Familism, Institutionalism, and the Residual Welfare State
3. 学会等名 The 18th East Asia Social Policy Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木鉄忠
2. 発表標題 イタリア・チッタスロ 運動と日本の地方都市への示唆 前橋・赤城チッタスローの移入プロセスを事例に
3. 学会等名 地域社会学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 鈴木鉄忠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上毛新聞社	5. 総ページ数 75
3. 書名 「見知らぬ私の地元」の探究: 前橋・赤城スローシティのフィールドワーク	

1. 著者名 野崎 志帆、ウォント盛 香織、米田 明美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 本気で女性を応援する女子大学の探求	

1. 著者名 坂本いづみ、茨木尚子、竹端 寛、二木 泉、市川ヴィヴェカ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 192
3. 書名 脱「いい子」のソーシャルワーク	

1. 著者名 森岡 正芳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 治療は文化である（臨床心理学 増刊12号）	

1. 著者名 竹端 寛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 216
3. 書名 家族は他人、じゃあどうする？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 鉄忠 (Suzuki Tetsutada) (20726046)	東洋大学・国際学部・准教授 (32663)	
研究分担者	高橋 真央 (Takahashi Mao) (50401609)	甲南女子大学・国際学部・教授 (34507)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関